

「教職生活を振り返って」

校長 神谷 孝

平成28年3月31日に定年退職を迎えることになった。これまで約36年間、無事に教職生活を終えることができたのは、家族をはじめ、友人、同僚、諸先輩方、後輩等多くの方々のお陰であり感謝の念に堪えない。

この間、多くの方々と出会い、沢山の事を学ばせていただくとともに感動体験を数多くさせてもらった。特に、輝かしい歴史と伝統を誇る知念高校の第23代目校長として、退職の年度に学校創立70周年記念事業が盛大に行われたことは、大変嬉しく私の宝物の1つになった。改めて職員の皆さんをはじめ、関係者に深く感謝申し上げます。

この36年間の教職生活を自分の記憶で辿り、足跡を振り返って見たいと思う。

1. 小禄中学校、那覇中学校、上山中学校の臨時的任用時代（昭和54年5月～昭和57年3月）

昭和55年3月に大学を卒業し、約1ヶ月余り中学生相手の富士塾でアルバイトをしていたが、教育庁から電話があり、5月から小禄中学校で産休補充として勤務した。初めての学校現場であり、1週間ほど緊張の連続であったが、先輩方の配慮ですぐに学校の雰囲気にも慣れることができた。授業は土曜日の4校時までであり、3年生5クラスの数学を週25時間を受け持った。中学校では、教師が休むと自分の授業以外に補充があり、1日6時間を受け持つこともあった。また、3年副担任として、担任の補助をしながら日々の教材研究、そして、放課後は野球部の指導を年輩（私の父と同年輩）の仲本朝徳先生とともにいった。仲本先生は、那覇地区はもちろん、県内でも名が知れ渡る体育教師として尊敬され（怖がられ）、以前先生が校内放送をすると全校生徒がスピーカーの方に向き、立ち止まって聞いていた。先生の指導方法は、他の教員が真似できないほど徹底していて、野球の指導も独特であった。夏休みに糸満市大度の海岸でテントを張っての合宿、暑い砂浜でティーバッティング練習だけという徹底したものだった。

仲本先生はいつも「生徒から学ぶ」ということを話されていて、授業で生徒が間違いするのは理由があるからだ。その理由をきちんと聞いて生徒から学ぶようにと話され、新米教師の私に多くのことを教えてくれた。

また、学校で一番若い私は、野球部の指導が終わり夕方になると、ビール、豆腐、スクガラス等の買い出し係で、先輩方の飲みにケーションの準備する日々が多かった。その飲みにケーションの席では、生徒指導の話合いが頻繁に行われ大変勉強になった。毎日有意義(?)な小禄中学校での補充勤務であった。3月の離任時に、互助会より「買い出し係」賞として、賞状をいただいた。

その翌年は大規模校の那覇中学校で4月から1年生の担任として勤務。小学生から中学生になったばかりの可愛い生徒達が相手であった。そのとき、私は自己紹介するとき、「孝」を何と読むか生徒に答えさせていた。ほとんどの生徒が「たかし」と読んでいたが、一人の生徒が「つちのこ」と読んだ。理由をきくと「孝」の字は「土とノと子」と書くからと答えた。その生徒を大いに褒めてやった。それ以来、自己紹介は「土とノと子」とも読みますと教えると年賀状で私の名前を「考」と間違えて書く生徒はいなくなり、きちんと「孝」と書いてくれた。今でもその生徒に感謝している。

あの頃は、臨任の先生方は長期休業の夏休みには補充が切られるのがよくあり、夏休みに無給で働

いている臨任教員も沢山いた。私も夏休みに切られたので、前年の小祿中学校では無給でやったが2年連続となると生活費が厳しくなり、学校には行かずにお中元の配達のアルバイトをして、生活費を稼いだものだ。2学期からは、普通どおり勤務し、学年末の3月には、1学年担当の先生方15名で鹿兒島の指宿へ旅行したのも良き思い出となった。

昭和56年年度は、4月から採用試験に向け本格的に勉強するために補充を断り、大学入試受験以来、猛勉強に取り組んだ。当時も採用枠が少なく難関の試験に合格しても教科によっては、採用待ちの状態であったり、離島北部の採用を断ると登載制度というのがあって採用順番が後に回されることがあった。猛勉強の甲斐あって一次試験を合格し、二次試験の面接の際には、島尻郡の野球大会で足を骨折しギブスを巻いた状態で松葉杖をついて臨んだ。面接官は教育実習でお世話になった教頭先生だったので、落ち着いて受け応えができた。そのお陰で採用試験になんとか合格できた。

9月から上山中学校で病休の先生の臨任として勤務。後に仲井間中学校校長となった故真栄田義全先生や現在糸満市教育長の上原武先生等素晴らしい先生方との出会いがあり、多くのことを学ぶことができた。

2. 佐敷中学校に採用される：教諭（昭和57年4月～昭和60年3月） 3年間勤務

平成57年3月初旬に県教育庁人事担当より自宅に電話があり、佐敷中学校に採用したいがどうかと聞かれ、逆に私は、高校で勤務したいので高校での採用はありませんか？と質問をしたら、叱られて自分の質問に答えなさいと言われた。そこで、私は考えさせてくれと言って電話を切った。その後、2時間程経ってからまた電話があり、再度佐敷中学校への採用の話であった。高校へ勤務したいがこれも何かの縁だと思い承諾した。

その頃は、全国的に中学校が荒れて、毎日のようにテレビでその荒れた様子が流された。採用された佐敷中学校でも同じように学校が荒れて、3階から腰掛けが投げられたり、窓ガラスが割られたりと大変な状況であった。挙げ句の果ては、早朝から体育館に生徒が集まり授業をボイコットしようということもあった。先生方も何とかこの学校を正常に戻さなければと必死に生徒指導に取り組み夜遅くまで職員会議で話し合いをした。（問題行動を起こした生徒と話し合いをしながら解決しようという意見と体罰をしてでも指導しようという意見）職員が一致団結して、問題行動は絶対に許さないという方針の下、生徒指導を行った。その結果、小さな問題行動でも全職員が指導すると生徒達も徐々に良くなっていった。そして、3年目からは学校も落ち着き、部活動の各大会や島尻地区陸上競技大会でも優勝するまでになった。また、新採1年目は、現在行われている“初任研”ではなく“新採研”というのがあり、校外研修も少なく、校内では教科の研究授業とHRの研究授業程度のものであり、ゆとりのある“新採研”であった。しかし、自分から積極的に実践豊富な先輩方からの指導を受け、多くの事を学んだ。また、多くの先輩方が書道の「書遊会」の会員として書道に親んでいたもので、私も会員になり、先輩方からの教えを請い本格的に書道を始めた。特に、作品出品時には、満足する字が書けるまで徹夜して書き込んだ。お陰で、月刊の冊子に私の作品が数回掲載された。

職員で私が一番若く、男性職員だけで組織された「三日月会」では、毎週のように部活動指導後に学校で飲みケーションがあり、問題傾向の生徒一人ひとりの指導方法についてよく議論した。若気のいたりですぐ、先輩方に喰ってかかったこともあった。また、修学旅行引率者の激励会では、ヒージャーを専門に調理する職員がいて「ヒージャー会（山羊会）」を夜遅くまで行い、学校で宿泊する日もあった。とにかく、飲みケーションが頻繁にあり、それがお互いの意見交換、情報交換の場となり、職員同士の気心も知りチームワークも良くなった。佐敷中学校での3年間は、私にとってその

後の教員生活の基礎を築くととても大切な期間であった。

3. 念願叶い高校教諭として八重山高校へ（昭和60年4月～平成2年59）4年間勤務

大学時代の野球部の友人から昭和62年に行われる「海邦国体」で高校野球軟式の部が八重山で開催されるから八重山高校の軟式野球部の監督をしないかとの誘いがあった。高校での勤務に強い希望があったので二つ返事で引き受けた。そして、念願であった高校の教員になった。

八重山に赴任して、早速軟式野球部を作ろうと部員募集を行うが、やはり高校野球は甲子園をめざす硬式の方へ部員が集まる。何とか12、3名で部を結成することができたが遊び半分の気持ちで入部している生徒達がほとんどで、技術的にも未熟なものばかりで、これから先の2年後の海邦国体が大変心配になってきた。練習場も学校のグラウンドは硬式野球が優先、軟式は市営の野球場はあるが、八重山は職域野球が活発で球場はほとんど空かないので、球場の駐車場で軽い練習だけ、時たま、職域野球大会がないときだけ球場を使わせてもらうという環境でのスタートであった。夏休みに鹿児島で南九州大会に参加して、あっさり鹿児島商業高校に7対0で敗れた。

その後、私は体調を崩し監督を外部の方をお願いしてもらった。その監督の熱心な指導のお陰で、海邦国体で見事に準優勝した。そのときは、石垣市内民に大きな感動を与えて、オープンカーで市内のパレードまで行われた。

八重山高校での1年目は2年担任を任せられ、生徒が主体的に行動するので、一々注意しなくても学級経営は成り立っていた。しかし、1学期途中から掃除のサボリ等があり、学級を引き締めようとしても中々できない状態であった。学級経営は4月が勝負だとその時に再認識した。その後、2、3年目は生徒指導部の交通安全担当として、特に免許所持者の指導や自転車指導（全校生徒の8割～9割が自転車通学）等を行ったが、オートバイ事故で約1ヶ月間意識不明まま一人の男子生徒が亡くなった。自分の指導の弱さを反省させられた。

また、八重山地区教職員組合文化祭において、八重山高校職員有志で沖縄劇「丘の一本松」を石垣市民会館で演じた。その時、私は主役（良助）を言いつけられ、毎日、ビデオを見たりウオークマンを聞いたりして台詞を覚えた。本番ではプロ顔負けの演技だったと観客から大きな拍手をいただいた。（今では台詞をすっかり忘れてしまった。）

国内では、昭和天皇が昭和64年1月7日に崩御し、1月8日から元号が内外、天地とも平和が達成されるという意味の「平成」に変わった。

4. 小禄小禄高校：教諭（平成2年4月～平成9年3月）7年間勤務

八重山高校から小禄高校には、第一希望での異動であり、今は亡き島袋勝校長には大変感謝している。1年目は、2年担任でやんちゃな男子生徒が多かった。1年で停学指導を受けた10名余の男子生徒たちは、音楽、体育の授業さぼり等で私に何度も指導された。

赴任して3年間は野球部の顧問として、外部監督の補佐をしながら部長をやっていたが、外部指導者に生徒達が反発し、野球部を辞める生徒が少なくなかった。外部監督が体調不良のため、4年からは監督として野球部を指導することになった。引き継いだときの部員数も十数名で、辞めさせないように褒めながら指導を行い、何とか部員も徐々に増えて活気が出るようになり、生徒達は自信を持って試合で戦うようになり、秋季大会、夏の大会と3回戦まで進出した。

平成6年度文部省教員海外派遣「沖縄県471団」23名の一員として、10月27日～11月12日までの17日間、オランダ、ギリシャ、ドイツ、イタリアの4ヶ国訪問の研修に参加させていただいた。ギリシ

ヤとドイツの学校訪問、アムステルダム、アテネ、そしてローマの教育文化施設等初めての訪欧は、私にとって毎日が新鮮で感動の連続であった。ギリシャ南部地方カラマータの高校訪問や旧東ドイツのゲルリツの小・中・高校を訪問し、授業参観や同じ教職員仲間との話し合い、交流を通じて、国の違いを乗り越えた連帯感や親近感を覚えた。また、民族・言葉・文化・思想・習慣・教育制度等は違うけれども教師達が将来の展望の上に立って、次代を担う青少年の教育に心血を注いでいるのは、どこの国も同じだった。

ドイツではベルリンの壁が崩壊して5年周年記念日（11月9日）が近づき、テレビや新聞等で当時の様子を報道していた。旧東ドイツのゲリツ市を訪問した時、教育長が両手を広げ我々一行を大歓迎し誇らしげに市内を案内してくれた。圧政から完全に解放された表情で東ドイツ時代は、教育は自分たちにとって都合のよいことだけを教えていたと語っていた。統一後は民主化が急速に進み、これまでの校長は全員が入れ替わり、小学校では33歳の若い校長が配置されていた。

ヨーロッパでは民族性の違いもはっきりしていた。ギリシャ人は陽気で我々がエイサーを踊り出すとすぐ仲間に加わり踊り出した。一方、ドイツ人はクールであり冷静にエイサーを見ていて、踊り出す人は誰もいない。やっと手を引っ張ってやると踊り出した。私にとって初めてのヨーロッパ視察研修の旅は、数々の貴重な体験ができ視野を広げることができた。

5. 首里高校：教諭（平成9年4月～平成14年3月）6年間勤務

小禄高校からの最初の転勤内示は糸満高校へ出た。やっと母校で勤務できる喜びもつかの間、最終内示で首里高校への異動が出た。糸満高校の教頭は、私が最終で動いた事も知らずに何故あいさつに来ないんだと電話があるほどだった。

伝統ある首里高校では、1、2年の学級担任や生徒指導部主任、野球部の部長等をさせていただいた。生徒達は、やはり学力も高く、文武両道をめざす生徒達が沢山いた。勉強でもやる気が起これば、自分で意欲的にどんどん進む生徒が多く頼もしく感じた。

田場稔校長は、県の編成整備計画で染織科の廃科に校長自ら猛然と反対し、染織科の存続に努めるとともに、国公立大学合格者アップの学校改革にも積極的に取り組んだ。また、宮良行雄教頭、玉城崇教頭も田場校長をよく支え、職員との連携・調整にも一生懸命であった。

野球部長として6年目、高良雅秀監督の下、平成14年の夏の大会でベスト4進出をかけ、沖縄水産高校と延長14回まで戦った。真夏の暑い中、授業カットで全校生徒が応援に駆けつけ、奥武山球場の3塁側スタンドは満席となり約4時間半の大接戦の末、惜しくも4対3で敗れた。また、女子野球部員として、田島綾乃さんが3年間男子部員とともに練習に励んだ努力を県高野連が認めてくださり、特段の配慮で1回戦の宜野座高校との試合でピッチャーとして始球式をさせてもらった。宜野座高校監督の奥濱正先生のご協力のお陰であり深く感謝した。田島さんにとって最高の思い出となり、校内弁論大会では、野球部員として、始球式のことを発表し見事に最優秀賞に輝いた。私は、彼女に野球部員として、3年間休まず最後まで練習に耐えてきたことを是非、校内弁論大会で発表してほしいとお願いしていたから大変嬉しかった。

6. 教育庁保健体育課：指導主事（平成15年4月～平成18年3月）3年間勤務

平成15年4月1日から教育庁保健体育課勤務となった。生涯スポーツの担当として学校現場と全く異なる仕事内容にショックを受け、データの入ったフロッピーを約200枚を引き継いだ時には、呆然とした。しかも、慣れない長時間のデスクワークは自分には向いてないと思い、約2週間後には学

校現場に戻りたい気持ちになった。しかし、生涯スポーツの推進と県民の健康・体力づくりに大きな役割を果たしている各市町村の体育指導委員（現在のスポーツ推進委員）の方々と接触する中で、大きなエネルギーをもらい気持ちを入れ替えることができた。そのときの金城幸信課長、富田弘副参事、國場薫主任指導主事には大変お世話になった。2年間の県体育指導委員協議会事務局の担当者として、各市町村の体育指導委員の方々約500名余と縁ができたことは私の大きな財産であり誇りに思っている。今でも各市町村との繋がりがああり、お世話になっている。

また、3年目は沖縄県スポーツ振興審議会を任せられ、審議委員である有識者の先生方の意見をまとめて「子どもの体力向上の総合的な方策について」の答申を出すことができた。特に、審議会委員長の琉球大学教授濱元盛正先生には多くの指導助言をいただき答申を冊子をまとめることができ感謝している。また、そのとき行政専門の瑞慶覧長行課長には、リーダーとしての考え方やリーダーシップ等について多くのことを学ばせてもらった。

7. 本部高校：教頭（平成18年4月～平成19年3月）1年間勤務

初めての教頭職で赴任した本部高校では、毎朝、校内巡視しながら校舎の屋上から伊江島が眺められ素晴らしい眺望であった。そのとき、いつも祖父が作詞した「伊江島渡し船」を口ずさんでいた。学年3クラスの小規模校の本部高校は、本部町内の4校の中学校と連携型の中高一貫教育の学校であったが、少子化の影響で毎年定員不足の状況が続き、県の編成整備計画で北山高校との統合問題が出てきていた。これを解消するために高江洲義一校長の指導の下、前任の仲地光男教頭から引き継いだ「ゴルフ部」の育成とゴルフ部後援会設立に力を注ぎ、施設課が広い運動場の奥にゴルフレンジを設置してくれた。また、県内外へのゴルフ部のピーアール、後援会の資金集め、また、本部町との連携で「ゴルフの町」宣言等も行い学校の活性化を図った。現在プロゴルファーとして活躍している本部町出身の比嘉真美子さんは、県外の多くの高校からの勧誘があったそうだが、地元の本部高校に進学し、ゴルフ部で活躍し全国に学校の名声を高めてくれた。

また、PTA会長平良昭一氏は、学校統合を心配して積極的に足を運び、学校存続に真剣に取り組みPTA組織から地域を巻き込んだコミュニティーを入れてPTCA組織に改編してくれた。

8. 南部工業高校：教頭（平成19年4月～平成21年3月）2年間勤務

初めての工業高校勤務で、普通高校と全く勝手が違い日々戸惑いを感じながら教頭としての勤務であった。護得久朝輝校長には大変お世話になった。校長自ら生徒の活躍を大きな掲示板に張り出し、生徒に自信と誇りを持たせていた。教頭席は国、数、英の計6名の小さな普通科職員室にあり、工業高校独特の各科の内容を把握するのに時間がかかった。

また、南部農林高校との統合問題に大変苦労した。平成19年4月下旬に教育庁総務課から電話があり、少子化のため生徒数減となり県の編成整備計画で南部農林高校との統合があるので進めてもらいたいとのことがあり、前任の教頭から引き継ぎもないのに寝耳に水の話であった。その後、総務課の教育企画監と担当指導主事が来校し、校長と事務長、私は説明を受けた。平成24年に南部総合実業高校(仮称)を開校したいので平成20年度までには統合を決定し、21年度に校舎建築の国庫補助申請をするとのことであった。教育庁内に南部総合実業高校(仮称)設置準備委員会が設置され、南部工業の学年3クラスを2クラスへ、南部農林高校の学年5クラスを4クラスにし、学年6クラスの南部総合実業高校(仮称)の計画案が出された。そのことを職員に説明すると以前に統合問題は解消したのではないかと猛反発を受けた。しかし、県の方針を無視するわけにはい

かないので、職員に粘り強く説明し、機械システム科、IT環境科(電気情報・住居環境)、コンピュータデザイン科の3科と何度となく話し合いを行い、結局、歴史が新しく平成17年度から設置されたコンピュータデザイン科が仕方なく廃科することになった。南部農林高校も1つの科を廃科する方向に話し合いが行われた。平成22年度からは、廃科予定のコンピュータデザイン科は生徒募集停止するところまで決めて転勤することになった。ところが、この統合問題に南部農林高校同窓会が猛反発して県議会を動かし、県議会での承認を得られないようにしたため、平成21年度の最後の日、平成22年3月31日に統合が白紙になったのであった。それで、南部工業高校の存続は認められたが2学科になり、コンピュータデザイン科の廃科で女生徒がいなくなった。

私は教頭として、ものづくりで頑張っている先生方には最善の支援をした。機械技術部顧問の真境名勝先生から三重県鈴鹿市で行われるソーラーカーレース大会へ出場したいとの話があり、職員は当初難色を示していたが、南部工業高校のものづくりを広くアピールする絶好の機会であると思い、「小さい学校から大きな夢への挑戦」というキャッチフレーズで、職員を説得して大会出場を了解してもらった。いざ大会出場となると派遣費やソーラーカーの制作費、装備費、輸送代、モーターも新しく購入したいとのことで費用がかさんだ。その対応に保護者会を立ち上げ、商品販売での募金や企業等への寄付金集めに東奔西走して、何とか大会に出場させることができた。また、マスコミにも取材依頼をお願いし、新聞やテレビ放映で学校の宣伝に大きな効果があった。その他ウエイトリフティング部が九州大会や全国大会での優勝、写真部の写真甲子園全校大会出場などで学校の活性化に大きく貢献してくれた。平成22年の全国高校総体沖縄大会「美ら島総体」では、八重瀬町でウエイトリフティング競技の開催が決まっていたので、顧問の屋良先生のアイデアで東風平中学校と具志頭中学校でデモンストレーションを行い、翌年は素晴らしい生徒達が入部し全国制覇に繋がった。

9. 糸満高校：教頭（平成21年4月～平成22年3月）1年間勤務

母校に初めて教頭として赴任した。教頭二人制で森山和則教頭が教務関係や進路等を担当し、私は、主に生徒指導、環境美化等を担当した。金城孝忠校長のリーダーシップの下、次々と学校改革がなされていた。職員会議の司会は教頭が担当、校務分掌案作成も教頭、教育課程の改善、校時の変更、そして、進路講演会の実施、校長だよりの毎週発行等があり、多くの事を学ばせてもらった。校長としてブレない。職員との意見の衝突はあっても生徒のために根拠を持って対応していた姿は忘れられない。また、知念高校と同様に国公立大学合格者数が伸び悩み、進路指導にも力を入れ、主幹教諭の導入も校長が積極的に取り入れた。

進路に熱心な保護者がいて、自分の子どもから職員の授業のようすを聞き、進捗状況や指導方法をチェックしたものを教頭に報告したり、また、自分の子どもは、難関大学を受験するので、授業中も独自の問題集をさせてもらいたいなどと個に応じた教育を保證すべきとの要望があり、その対応に苦慮した。

部活動も活発であり、朝からグラウンドと体育館は所狭しと活気があり、放課後は更に活気満ちあふれ、顧問も生徒も熱心に練習に励んでいた。現在、プロ野球巨人で活躍している宮國椋丞投手は、2年生として、勉強も野球も一生懸命に取り組む模範生であった。授業中は、真剣に先生の説明を聞き、質問にもきちんと応えていて成績も優秀な好青年であった。

10. 真和志高校：校長（平成22年4月～平成23年3月）1年間勤務

平成22年4月1日県教育長より、真和志高校の校長の辞令を受け、すぐに学校に向かった。校長職

として初めての学校で、心地よい緊張感で赴任した。入学式を3、4日後に控え、一人の生徒が入金未納で、事務も再三再四電話を入れるが連絡がとれないとのことだった。入学するのか、しないのか早急に確認しなければと思い、私は夜に2日ばかりでやっと連絡がとれ、入学式前日に納入してくれた。これでやっと新年度のスタートができると思いホットした。

単位制高校、制服なし、服装は自由、3ヶ年で卒業できずに単位履修クラスもあり、しかも中途退学者が毎年60名～70名、中学校時に日の当たらない生徒達や不登校の経験ある生徒達が相当数いた。今までに経験したことない学校のように当初は戸惑いもあったが、職員が熱心に指導している姿に安堵感を覚えた。

ある国語教師の授業は、20名弱の生徒達であったが座席を前列に詰めさせて座らせ、発問しながら生徒達が応える素晴らしい授業を展開し、誰一人寝ることなく全員が真剣に受けていた。やはり、教師は授業で勝負することを再確認した。また、中学校時は不登校であった生徒が、ある英語教師の誉めた一言で意欲的に勉強をはじめ、真和志高校から12年ぶりに琉大の理学部に合格した。その他、朝食抜きの生徒達に自分で作ったおにぎりを配布している担任もいた。

朝の遅刻生は、毎日のように50名以上、途中登校する生徒、タバコ等による懲戒指導等も頻繁にあった。私は、全体集会で学校からタバコを絶対に無くすことを全校生徒に宣言し、毎日、朝、昼とトイレを巡回し、タバコ吸い殻を50本ほど拾って歩いていた。また、基礎学力のない生徒が多く、停学指導しても課題をきちんと終わることができずに解除までに1ヶ月かかる生徒もいた。それで、次年度から県教育委員会の「生き生き活性化事業」の指定を受け、「学び直し」を導入することとした。また、生徒指導については、次年度から校則違反者に対してチケット制を導入することに決め、生徒指導の体制の構築を全職員で確認した。その矢先に人事異動で県教育庁県立学校教育課人事管理監を命じられ、しばらくはショックが大きかった。

11. 県教育庁県立学校教育課：人事管理監（平成23年4月～平成24年3月）1年間勤務

平成23年4月に人事管理監を拝命し、職責の重さをヒシヒシと感じながらの13階勤務、以前、保健体育課に3ヶ年間勤務したが、県立学校教育課は初めての勤務であり、しかも教職員の服務や人事関係、懲戒処分等の言い渡し等があり、毎日が厳しい業務であったが、教育庁内で人脈を築けたことは大きな財産となった。

この年は不祥事が多く、「中学生買春」で警察署の留置所に拘束されている教諭に事情聴取にも行った。留置所では、容疑者との面会は1日1回だけと決められていて、本人が家族との面会を優先したため、我々との面会は当初できないと言われた。留置所の責任者に頼み込み何とか面会ができた。透明合板越しに容疑者から聴取を行ったが、やつれた姿が忘れられない。家族の方々も大変かわいそうだった。

12. 知念高校：校長として4年間を振り返って（平成24年4月～平成28年3月）

平成24年4月2日(月)の本庁での辞令交付式を終え、県教育庁県立学校教育課から知念高校第23代目の校長として赴任した。喜びと嬉しさで胸が一杯であったと同時に責任の重さもヒシヒシと感じた。シンボルゲート沿いに全国制覇の記念碑がいくつも建立され、輝かしい実績と素晴らしい歴史と伝統を誇る南部の高校として、母校の糸満高校と常に切磋琢磨しながら発展し、元県知事の3代目校長屋良朝苗先生をはじめ、元教育長11代目校長の津留健二先生等、素晴らしい校長先生方が創り上げた学校であり、果たして自分が務まるかどうか少し不安な気持ちがあった。

しかし、生徒達に会うときちゃんと足を揃えて「おはようございます」とあいさつするのと、朝の遅刻が一桁であるのに感動した。約千名余の生徒達がいるのに時々遅刻者ゼロの日もあり、更に感動！このような素晴らしい生徒達の個性・能力を更に引き伸ばさなければならないと思った。

以前から私は、学校は「知」「徳」「体」のバランスのとれた生徒を育成し、社会に有為な人材を輩出しなければならないと考えていたので、文武両道をめざした学校づくりに励む決意をした。教育行政に勤務している時に、知念高校は、部活動も活発で生徒指導等の問題も少ない素晴らしい学校であるのに進路決定率、国公立大学への合格者が思ったほど伸びていないのが気になっていた。本県の進路決定率は全国最下位(H25年度85.5%)で全国平均(約95%)との差はかなりある。知念高校は、本県平均よりも更に低く、過去3年間とも約77%、78%であった。特に卒業時に進路未定者が毎年70名～80名いて、これは3年生9クラス中、約2クラス分に相当する人数であり大きな課題であると思った。勿論その中には、浪人して自分の希望進路に進みたいと生徒達もいた。しかし、卒業時までに進路決定ができるように生徒達にきちんとした進路指導をしなければと思い、早速教頭に指示して進路指導や進路講演会等に力を入れ、生徒の進路意識の改善を図るようにした。特に、3年担任や進路指導部の先生方、そして小論文指導等でいつも遅くまで指導した先生のお陰で、H24年度84.4%、H25年度93.0%、H26年度85.8%まで大幅に改善され、職員の皆さんに感謝している。

また、国公立大学合格者についても21名、20名、16名と以前よりは少しだけ伸びたかなと思える程度まではなっているが、生徒達は入学時から約80名～100名が国公立大学進学を希望している現状には、応えられてない状況であり更なる対策検討が必要である。

P T Aと70周年記念事業期成会にも大変感謝している。長年使用した学校車が板金等の腐食で雨漏りやエンジントラブルがあり、買い換え時期にきていた。P T Aには生徒派遣費の積み立て予算を流用して、学校車、ワンボックスカーを購入していただいた。70周年記念事業でも前倒しで学校車とワンボックスカーを購入できた。在任中に車4台も購入できたのは、日頃の先生方の熱心な部活指導のお陰であり、P T Aと70周年記念事業期成会の皆さん方にお礼を申し上げたい。また、70周年記念事業期成会からは、トレーニングマシン、吹奏楽楽器、壁時計、持ち運びに便利な学級用テント等も寄贈してもらった。感謝！生徒が大切に使うことを願う。

生徒の活躍で一番思い出に残っているのは、平成24年度全国高校総体で弓道部女子が、県勢女子団体として初優勝したことである。顧問の諸喜田優子先生もびっくりするほどの素晴らしい活躍であったと報告を受けた。本校には弓道場がなく、南風原町にある県弓道連盟の弓道場に 通って練習をしている。外部コーチが主に技術的な指導をしていると聞き、外部コーチにあいさつするためにその弓道場を訪れたことがあった。大城和子コーチ、髙原浩一コーチの日頃からの熱心な指導の賜である。また、大城コーチは生徒達のために用具も自前で揃えたりと大変なお世話になっていることを初めて知って、何度も何度もお礼をした。弓道競技の場合、全国優勝すると、賞状、優勝旗、盾、個人メダルをはじめ、カップ等沢山の授与があり、その栄誉の大きさに驚嘆した。

この優勝は、本校の生徒・職員をはじめ地域の方々や県民に大きな感動と自信と誇りを与えてくれた。監督の諸喜田先生の話では、相手に勝つとか、負けるとかを考えないで、一本一本の弓の矢を的に向け、心を集中して的を射った結果が一戦一戦の勝利に繋がり、最終的には全国優勝ができたとのこと。一人ひとりの技術はもちろんですが一本一本の集中力と素晴らしい チームワークの賜だと思った。一本一本の積み重ねの大切さ、それによって、大きなことを成し遂げることができたということを知ってくれた。

本校の環境美化について、毎朝、部活動の生徒の皆さんが交代で学校前の国道331号線沿いのチリ

や空き缶拾い、また、校門や校庭を清掃してもらい気持ちよく通学、通勤ができています。平成25年には、長年、朝の国道沿いチリ拾い等の美化活動が認められ、与那原町の推薦で、めんそーれ沖縄県民運動推進協議会から表彰をされた。大変素晴らしい活動であるので今後も継続してもらいたい。また、着任した時、校庭に花がほとんどなく物足りない環境であったが、用務員の呉屋幸憲さんのお陰で年中花が咲き誇り、職員、生徒が花を眺めている光景がよく見かけるようになった。とても良い環境になった。教室内の環境も靴箱設置により靴の散乱がなくなり、廊下側に傘立て設置等で教室環境も改善された。しかし、生徒個人棚の整理整頓がまだ課題として残っている。

私は本校の大きな課題である ①家庭学習の定着 ②進路決定率の向上 ③国公立大学合格者アップに取り組み、文武両道が実践できる学校をめざしてきた。その中で進路決定率の向上については少し成果がで出たと思っている。しかし、家庭学習の定着、国公立大学合格者アップには、十分な成果が出てないので、今後も継続して取り組み文武両道が実践できる学校を全教職員で目指すことを期待したい。

13. 野球について

思いつくままに4年間勤務した知念高校でのことを書き記してきたが、ここで野球のことについても記する。私は、小学校3年頃から野球をはじめ、部落の広場でよく先輩達に混じって野球に熱中し、小学校6年には学校代表選手として糸満地区大会に出場した。中学校では、背丈は小さかったが上手い方であったので、キャプテンを務め部員を引っ張ってかなり厳しい練習をした。その甲斐あって新人大会では地区優勝をした。しかし、中3の夏季大会では、優勝した糸満中にセンターのエラーで延長戦で敗れ、その悔しさは今でも忘れられない。高校では、甲子園を夢見て、すぐに野球部に入部したが帰宅時間が遅く、辞めざるを得なかった。琉球大学では、入学後2、3日目に野球部に入部し4年生の春の大会まで、勉強より野球に熱中していた。大学3年の秋からは、学生監督してチームの采配を振るい、あわや沖縄3大学リーグ戦大会で優勝する寸前までいったが最終戦で沖国大に2対1で敗れた。

高校時代に夢が果たせなかったのが、将来指導者になって甲子園に出場したいと思い、高校教師を目指した。しかし、採用は中学校であったが、高校教師になることを諦めなかった。大学時代の野球部の友人の誘いで昭和62年海邦国体の軟式野球指導者として、八重山高校の教師になることができたが高校の軟式野球チームは県内にはなく大変苦勞した。その後、八重山高校から小禄高校に転勤した平成2年から、本格的に高校野球の役員に携わり、野球部長をしながら高野連の総務部副部長として、試合の記録をとるスコアラーとして裏方の仕事を任された。その他に試合の記録を新聞社やテレビ局へ提供、開会式、閉会式の準備、女子マネジャーのアナウンス指導等の仕事を担当した。以来約25年になり、その間、監督と部長を13年間務め、平成25年から県高等学校野球連盟会長を務めることになった。会長になると出張が多くなり学校を留守にすることが増え、教頭には大変苦勞をかけた。4月下旬は春の九州大会、5月は招待野球、6月から7月までは夏の選手権県大会、8月は夏の甲子園大会、9月から10月中旬までは秋の県大会、10月下旬は秋の九州大会、11月は1年生大会、3月は春の県大会、甲子園の選抜大会、宮崎交流試合等があり、この間の土日は野球場に釘付けである。野球三昧となり、家庭サービスもできず妻にはいつも小言を言われている。

会長として、甲子園球場に何回も行かせてもらっているが、何回行っても甲子園は素晴らしく、鳥肌が立つくらいの感動を感じる。高校球児があの大観衆の前で、白球に青春をかけたプレーの一投一打に歓声が沸き上がり、直向きなプレーが本来の力を超えるプレーを生み出し、筋書きのないドラマ

が展開される。そして、試合終了後の大観衆からの惜しめない拍手は、すべての選手が主役であるという瞬間であり、「甲子園には勝ち負けはあっても敗者はいない！」という言葉があるとおり、高校野球の素晴らしさを実感するのである。是非、このような体験をすべての高校球児に味わってもらいたく、甲子園をめざして一生懸命にプレーしている球児の姿を毎年見守っているのである。

知念高校の校長としても、野球部が甲子園に出場するのを夢見ていたが、夢は叶いそうにない。しかし、本校野球部は、能力的には大変素晴らしい選手が多く甲子園に出場できる力は持っている。勝負に対する精神的な強さが備わればきっと甲子園に出場できる。甲子園は高校球児を人間的に大きく成長させる場所である。ここ5年以内には是非甲子園の切符を勝ち取ることを期待したい。

おわりに

昭和54年5月から平成28年3月までの約36年間、これまでの人生の半分以上教職に携わり、様々な失敗をしながら、多くの教え子や先輩・同僚に助けられ、こうして元気に退職が迎えらることを喜び、お世話になったすべての方々に深く感謝を申し上げたい。今後は、6歳と4歳の二人の息子の子育てをはじめ、これまで私を育ててくださった八重瀬町の志多伯部落や地域に恩返しができればと思っている。そして、いつまでも「チャレンジ精神」を持ち続けたい。